様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 １２ 日現在

機関番号：３３９１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２７００

研究課題名（和文）日本語を中心とした動詞句階層構造の統合的研究

研究課題名（英文）An Integrated Study of Verb Phrase Layers in Japanese, its dialects and other languages

研究代表者
青柳　宏（Hiroshi, Aoyagi）

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：６０２１２３８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本課題研究の目的は、研究代表者および2名の研究分担者が以前から主張してきた外項を導入しうる複数の機能範疇主要部が階層をなすという階層的動詞句仮説の妥当性を日本語を中心とするさまざまな言語事実から示すことにある。現代日本語共通語の受身と使役、自他交替のみならず、韓国語の受身と使役との比較、東北方言のラサルを始めとする自発・可能・受動形態素のバリエーション、および古語の受動形態素ル・ラルからラレへの史的変化の事実はすべて上記仮説を裏づけるものであることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
現在の統語理論では、外項を導入するのはv*(Chomsky 1998)もしくはVoice (Kratzer 1996)という単一の機能範疇であるという考え方が主流である。本課題研究は、現代日本語共通語のみならず、使役・受動に関する日韓比較研究、東北方言に広くみられるラサルを始めとする多様な自発・可能・受動形式の研究、ル・ラルからラレへの史的変化あるいは文法化の研究という、言語横断的、方言横断的、通時的観点から総合的に外項を導入しうる複数の機能範疇主要部が階層をなすという仮説の妥当性を示したという点で創造性がある。

研究成果の概要（英文）：The objective of our research has been to further support the Layered VP Hypothesis, where multiple functional heads (i.e., Voice, Cause, Applicative, etc), each of which may introduce External Argument, are stuck above verb phrase. The appropriateness of this hypothesis has been amply evidenced by facts of morphological causatives and passives in Korean, the -rasar morpheme in Tohoku dialaects, which renders either voluntary, potential or passive interpretation, and its variations, and the historical development of the passive -rare from -r/rar in Old Japanese as well as those of the passive and causative morphosyntax and transitive-unaccusative alternation in the present-day Japanese.

研究分野：言語学

キーワード：形態統語論　分散形態論　階層的動詞句仮説　使役と受身　自他交替　韓国語　東北方言　文法化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

Rizzi (1997)に始まる C（補文標識）の領域における Force（発話の力）、Topic（主題）、Focus（焦点）といった機能範疇の階層性を追究する言語地図作製(cartography)プロジェクトは、Cinque (1999)を経て T（時制辞）以下の領域にまでその探求の対象を広げた。2000 年ごろまでに(1)に示すように、内項(IA=internal argument)が VP 内に生起するのに対して、外項(EA=external argument)は(little) v (Chomsky 1995, 1998)または Voice (Krazter 1996)という機能範疇が導入するとの見方が定着した（以下、語順については日本語のように主要部後置型で示す）。

(1)　[TP ... [vP/VoiceP　EA　[VP　IA　V] v/Voice] T]

さらに、2000 年代に入ると、分散形態論(Distributed Morphology)の進展と相まって、(2)に示すように、VoiceP の上下、および VP の内部にも機能範疇が存在するとの提案が相次いでなされた。

(2)　[TP ... [<u>XP</u> (EA1) [VoiceP EA2 [<u>YP</u> (EA3) [vP [<u>ZP　IA　...　Z]^√R^v]^Y]^Voice]^X]^T]

たとえば、Borer (2005), McDonald (2006), Travis (2010), Fukuda (2012)らは X と Y がそれぞれ High Aspect (=Outer Aspect), Low Aspect (=Inner Aspect)であると主張した。また、Pylkkänen (2000, 2008)や McGinnis (2001)は Y と Z がそれぞれ High Applicative, Low Applicative だとの仮説を提案している。

２．研究の目的

上述のように 2000 年代以降 T 以下の項構造を形成する領域に機能範疇が複数存在するとの主張は多数の研究者によってなされているが、(i)それがいくつ存在するのか、また、(ii)その階層性がどうなっているのかに関する定説は未だ存在しない。しかしながら、日本語と韓国語およびこれらの方言はすべて主要部後置型の膠着言語であるという特質から、(2)の二重下線部 Z^√R^v^Y^Voice^X^T が文末に複雑述語として現れるがゆえに可視性が高いと考えられる。したがって、これらの言語や方言における動詞の使役・受動形、自発・可能形、自他交替といった現象をつぶさに考察することで、上記(i), (ii)の問に答え、ひいては一般言語理論に貢献するというのが、本課題研究の目的である。

３．研究の方法

上記の研究の目的を達成するために、本研究では 3 名の研究者が役割分担を行い、それぞれ以下Ａ～Ｃの研究課題に取り組んだ。

<u>Ａ．日韓語の動詞句階層と多重接辞化の比較研究（青柳宏（研究代表者、研究統括者））</u>

日韓語は統語的類似性が高いが、文法化(grammaticalization)の度合は前者の方が後者より進んでいるとされる(Shibatani 1994)。たとえば、日本語では「～始める、～続ける、～終わる／終える」のようなアスペクトを表す文法化された補助動詞の生産性が高い(Fukuda 2012)が、韓国語ではその生産性は軒並み低い。さらに、前者の「うつる(ut-ur)／うつす(ut-us)」(共通語幹は「空つ(ut-u)」:『時代別国語大辞典：上代編』)のように、自他交替しつつ、さらに受動化(うつられ(ut-ur-are))、使役化(うつさせ(ut-us-ase))、使役受動化(うつさせられ(ut-us-ase-rare))するものも韓国語には存在しない。

本研究課題は、日韓語の文法化の度合の違いを両言語の動詞句階層性のあり方と多重接辞化の観点から究明することを目標とした。

<u>B. 東北地方の諸方言における動詞句階層の比較研究（高橋英也（研究分担者）</u>

岩手県には、ラサル形式と呼ばれる形態素が存在し、自発・状況可能・受動という 3 つの用法(「酒がたくさん飲まさる(=思わず飲んでしまう：自発)」、「この靴は小さくて履かさらない(=履くことができない：状況可能)」、「校庭に大きな円が描かさっている(=描かれている：受身)」)が認められる(竹田 1998 など)。同様の表現形式は、東北・北海道を中心とした、東日本の比較的広範な地域において、広く観察される(加藤 2000, Sasaki and Yamazaki 2006, 円山 2007, 白岩 2012 など)。しかし、このラサル形式について、形態統語論の観点から考察を行った先行研究は少ない。

本研究課題では、ラサルと類似した形態素を有する東日本の他地域に考察の範囲を広げることで、動詞句階層についての方言横断的研究をさらに進めた。特に、岩手県と地理的に近接する東北地方の諸方言(津軽方言、山形方言、福島方言など)における類似形式の差異を取り上げ、それらとラサル形式との差異について、動詞句階層システムの違いから究明することを目標とした。

<u>C. 膠着形態素の発生とその統語的定着に関する通時的研究（中嶌崇（研究分担者））</u>

日本語の動詞句派生に関わる膠着現象は、 分散形態論に基づく Decompositional Approach (DA)を用いた通時的分析の結果、動詞句の基本構造が Voice 以下の構造から Voice 以上の階層((2)の X)を含むより複雑な階層構造へ統語的に拡張する過程で起こったものであることを示した(Nakajima 2011, 2014, 2015)。この階層構造の深層には語根√R が投射する基底事象((2)の vP が表す)があり、その上位に基底事象の生起に関わる上位事象が投射する。形態的に複雑な動詞句はそれら事象間の関係を表すのであるが、重要なのは、投射には必ず事象を拡張する主要部が必要だと言うことである。DA の独創性は、 ス・サスあるいはル・ラルのような形態素が単一

のものではなく、s, a, r と分離・独立した主要部の集合として扱われるべきことを示し、いわゆる動詞の自他交替もそれら主要部と密接に関わっていることを明らかにしたことにある。

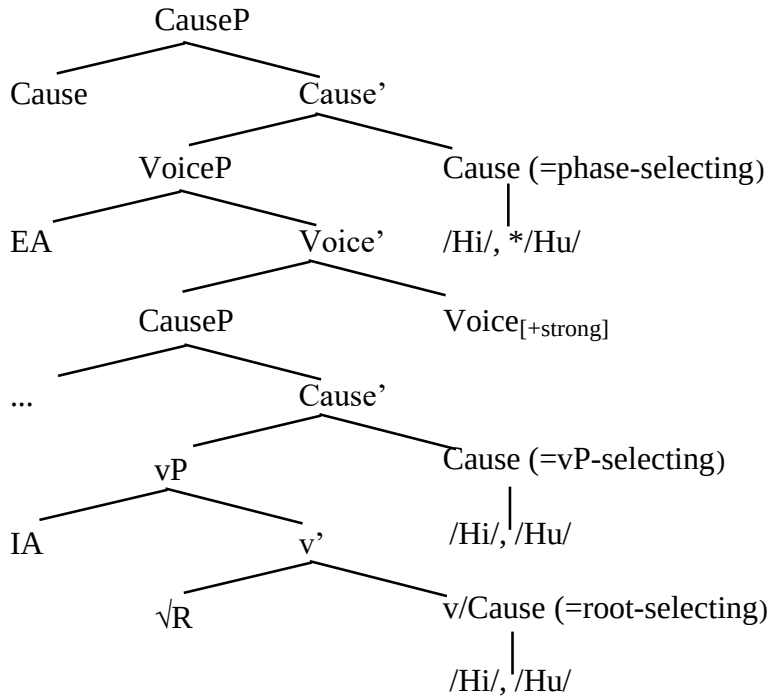
本課題研究では、その成果を踏まえ、それぞれ使役、受動のマーカーとなる子音 s と r が統合構造にどのように導入され、また、それぞれの意味と対応するのかを追究することを目標とした。

４．研究成果

研究課題Ａ（青柳担当）では、まず、H29 年度の研究で日韓語の多重接辞化の生産性の違いに着目し、他動化・自動化を実現する形態素が、日本語がス・ル(基底形はそれぞれ/Vs/、/Vr/、V は母音変項で、そのデフォルト値は/a/)という子音中心の対立表示システムを持ったのに対し、韓国語は/Ci/(C は子音変項で、そのデフォルト値は/h/)という母音中心のシステムを持ったため、前者では/as/、/ar/に子音拡散(consonant spreading (Nishiyama 1998))と一段化が適用し、それぞれ/**as**/ –> /s**as**e/ –> /s**as**e/、/**ar**/ –> /r**ar**/ –> /r**ar**e/に拡張する余地があり、さらに/Vs/、/Vr/の語根編入(radicalization)により、「うつさせ(ut-us-ase < {{{√ut, √Vs}, v} sase})」(V は母音調和により/u/で実現)のように多重接辞化も可能となったが、後者では中期韓国語には存在し、慶尚道方言などに残るものの、二重接辞/Hi-Hi/形はその後子音脱落(/Hi-Hi/ –> /Hi-i/)や母音縮約(/Hi-i/ –> /Hi/)などの音韻変化により、/Hi/に収斂せざるを得ず(伊藤 2015)、この/Hi/は動詞化素 v の位置にとどまったままであるという仮説を Aoyagi (2017)で提案した。

しかし、H30 以降の研究で韓国語には上述の/Hi/-/Hi/形に加えて(Aoyagi 2017 で考慮しなかった/Hu/形を含む)/Hi/-/Hu/形、/Hu/-/Hi/形、/Hu/-/Hu/形のすべての多重接辞が済州島方言や慶尚道方言に存在し、さらに/Hi/-/Hu/形については現代ソウル標準語にも残存することが判明したため、Aoyagi (2019, to appear)では前述の音韻的縮約による分析を見直した。まず、使役から受動が派生するという文法化の方向が一般的である(Keenan & Dryer 1985, Haspelmath 1990)ことに鑑み、/Hi/, /Hu/はいずれも元来使役形態素であるものの、前者が併合する述語語根の結合価を選ばないのに対して、後者が形容詞や非対格自動詞とは併合するが、他動詞や非能格自動詞とは併合しない(つまり、外項(EA)を伴う述語とは併合しない)という事実に着目すると、Pylkkänen (2008)の示唆する Cause の現れうる 3 つの位置のうち、/Hi/はいずれの位置にも現れうるが、/Hu/は Voice よりも高い位置には現れ得ないことが分かる。

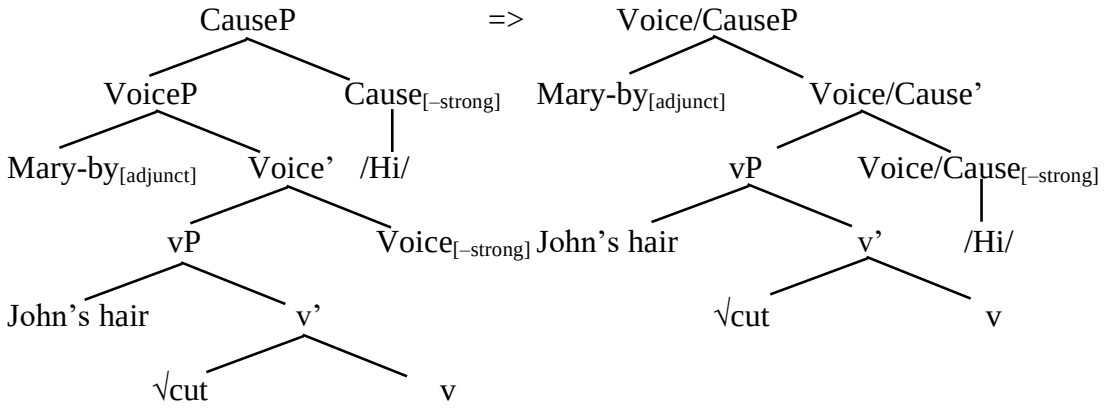
(3)



(3)に示したように、/Hi/は(i)語根(root)を選択する Cause の位置にも、(ii)vP を選択する Cause の位置にも、(iii)外項(EA)を伴う phase (通常 VoiceP)を選択する Cause の位置にも現れうるが、/Hu/は外項(EA)を伴う述語は選択しないので、(iii)の位置には現れない。しかし、/Hu/は(iii)を除外しても、(i), (ii)には出現しうるので、/Hi/と/Hu/の組み合わせは(少なくとも潜在的には)4 通りのすべてが可能であり、これは上述の事実と合致する。

さらに、Aoyagi (2019, to appear)では、/Hi/のみが受動形態素としても使用可能であるという事実は、上記 Cause の選択制限を満たすために Cause-Voice bundling が適用せざるを得ないからだとの分析を示した。

(4)



(4)の左図が示すように、Voice と Cause が弱い([–strong])主要部であるときは外項(EA)が抑制される(前者については受動文、後者については変化他動詞に対応する非対格自動詞文を思い起こされたい)。このとき、Voice は外項(EA)を伴わないので、上記(iii)の選択制限は満たされない。したがって、右図のように Cause-Voice bundling が適用して初めて、Cause は vP を選択することが可能となり、(ii)の選択制限を満たすことができる。さらに、日本語と同様に韓国語においても所有者上昇による受身が可能(Yeon 2002)なので、(4)の右図の John が[Spec, T]に移動すれば、(5)が派生する。

(5) John-i Mary-eykey <John> meli-lul kkakk-i-ess-ta
John-nom Mary-dat hair-acc cut-pass-pst-decl
‘John had his hair cut by Mary.’

(5)は使役の解釈も可能だが、このときは所有者上昇は起こらないので、「髪(meli)」は John のものでも Mary のものでもよいが、受身の解釈のときは所有者上昇により、「髪」の解釈は John のものに限られるという事実にもすっきりとした説明が可能になった。

研究課題 B（高橋担当）では、まず、H29 年度の研究において、生成文法の枠組みで動詞の自他交替と可能動詞化に並行的な分析を与えている Fuji et al. (2008a, b)を取り上げ、その妥当性について、大久保 (1967, 1984), 荒井 (2006)らにおける自然発話コーパスから得られたデータの観点から批判的に検証を行い、可能動詞化を具現する接辞 e の獲得、さらに大人の文法でもしばしば観察される「立つ/立てる」に見られる可能動詞と下一段他動詞の多義性に対して、少なくとも日本語を母語とする子どもの文法においては、可能動詞化素としての接辞 e と下一段他動詞を形成する接辞 e が統語的に同定される可能性があることを論じた。

次に、H30 年度の研究において、岩手県沿岸地方における「長形」の可能形式(飲めえる)が、状況可能の文脈におけるラサル形式(飲まさる)と相補的に専ら能力可能の文脈で用いられるというデータが存在することを、質問紙調査の結果から紹介し、それに対する理論的考察を行なった。特に、H29 年度の研究成果を踏まえて、可能動詞化と下一段他動詞化を具現し得る接辞 e の汎用性に関して、イベントの完遂とその影響性を表す[+Completive]および動詞の表す行為における動作主の意図性・制御性を表す[+Control]という 2 つの素性を導入し、それぞれが可能動詞化と下一段他動詞化に関与すると提案した。そして、この 2 つの素性が Nakajima (2014)の意味での Get 主要部において束(bundle)を成し、最終的には PF における語彙挿入を経て音形/e/として表出する、という分析を提示した。この分析により、下一段他動詞による可能動詞化は、いわゆるラ抜き言葉として共通日本語において規範性を欠くものの、一部の方言や子どもの言語獲得過程においては原理的に産出可能な述語形式であることに一定の理解が得られた。他方、岩手県沿岸地方の方言文法に関しては、2 つの素性はそれぞれ独立した主要部 Get と Cause に容易に分散すること、そして、下一段他動詞のみならず五段動詞をなす動詞句においても、Cause 主要部に対して[+Control]が随意的に付与されることを提案し、その帰結として、当該方言においては、(i)ラ抜き言葉が（専ら能力可能の文脈において）容認度が高いこと、(ii)共通日本語には存在しない「長形」の能力可能形式が、五段動詞を入力としても産出されることに説明を与えた。

最終年度である H31 年度は、前年度までの研究成果を、関連する以下の 3 つの研究課題へと展開させた。まず、受動形態素ラレに関して、これまで広く想定されてきたような単一の形態素ではなく、階層構造を内包する機能辞 (r)ar と e に分離されるとの想定の下で、(i) 接辞 e がエルの文法化した機能範疇 Get 主要部として受動文の主語を認可し、(ii) (r)ar は、出現・発生を表す動詞アルが文法化した非対格構造を持つ機能範疇 Inch(oative)であると提案し、伝統的な分類における 3 種類の受動文に対して統一的分析を提示した。そして、日本語における受動文の動詞句構造は、「VoiceP で表されるイベントの発生・出現 ((r)ar) の影響を GetP 指定部の名詞句が被る (得る/e-ru/)」と読み解くことができるという点で、意味解釈と文構造が階層的対応関係にあると論じた。

第二に、可能動詞＋テイルのアスペクト解釈に関する竹沢 (2015) の観察を踏まえ、派生接

辞としての形態素 e を介した可能動詞化と自他交替の連続性という観点から、接辞 e の意味論的な役割について検討を行なった。特に、(i)vP と GetP は、事象構造における「過程 (process)」と「結果 (result)」の領域にそれぞれ対応し、(ii)テイル形の解釈は、そのスコープ内にある vP と GetP の「可視性」により決まることを提案し、より広範な V-e-te-iru 形式のアスペクト解釈に対する統一的な説明を提示した。特に、外項を認可しない弱い(weak)主要部は強い(non-weak)主要部と再併合(Remerge)されるという Nakajima (2015)の主張を援用し、意味解釈における可視性が統語構造における指定部の生成と相関すると主張した。すなわち、五段他動詞に基づく可能動詞「子どもが漢字を書けている」や含意動作主(Stroik 1992)が認可される中間動詞「このシャツは洗濯機で洗えている」では、共に「過程」を表す vP の指定部が外項により占められることから、表層的な自他の差異に関わらず、共に進行相として解釈可能になる。他方、「ロープが 2 つに切れている」のように結果相が優位な事例については、動作主を指定部において認可しない v が Get と再併合し、表層主語「ロープ」は GetP 指定部に直接導入され、「結果」領域である GetP が可視的になる。この分析により、「(周囲の力によって）太郎は自分の夢を叶えた」における主語「太郎」が制御性（意図性）を欠く非動作主（Experiencer）として解釈可能である事実も容易に捉えられる。

次に、福島方言と岩手方言で見られるアル形式における可能・受動の多義性と「スーツが赤い糸でしつけらってる／*子どもがよく躾らってる」の対比に見られるような、アル形式による（短形）受動文の主語が非情物に限定されるという事実について検討を行なった。特に、同一の述語形態は同一の動詞主要部における音形具現の反映である(Jung 2020)との想定の下、可能と（短形）受動の接辞 ar は、(i)事態の出現・発生を表す本動詞アルの文法化に由来する機能的範疇 v[GO]の具現で、(ii)派生元の動詞が潜在的に内包するアスペクト的限界点を顕在化させるとの分析を提示した。さらに、工藤 (2014) におけるアスペクト的限界性（開始限界と終了限界）の概念に基づき、「このペンは いつもよりスラスラ書がっでる（書けている：進行相)」のような可能形式は開始限界点に、他方、「名前がノートに 書がっでる（書かれている：結果相)」のような受動形式は終了限界点にそれぞれ向かうというイベント性(GO)により区別されるとの提案をした。最後に、「T シャツが乾がさってる（乾かされている：受動)」「このＴシャツは室内ですぐ乾がさる（乾く：状況/属性可能)」に立ち返り、語彙的使役 s を含む他動詞「乾かす」を入力とする（短形）受動のアル形式と、自動詞「乾く」のラサル形式として、それぞれ同定されることを提案した。両形式は、動詞主要部の bundling の有無（ar (v[GO])は韓国語の-eci と同様に変化事象[vP ..... [√P .....] v[CAUSE]]を選択するのに対して、(r)asar は v[CAUSE]-v[GO]の束(bundle)をなす）により統語的に区別されることを論じた。

<u>課題 C（中嶌担当）</u>では、H29~31 の 3 年間で以下のことを明らかにした。

まず、形態的に分離された形態辞はそのまま点在するのではなく、文法化された述語としてまとまりを示すことを発見した。すなわち使役のサセ・受動のラレは sas+e、rar+e と分析することができ、その内 sas、rar（それぞれ、サス、ラルという古形に対応する）はそれぞれ他動詞構造・非対格構造を持つ述語である。e（「得」）は GetP としてその述語の上に投射する。日本語において使役・受動構文が意味的に多様な文を派生するのは、sas、rar と GetP が相互的に作用するからである。sas、rar の述語を「繋属述語」(Trans-Predicate (Tr-P))と名付け、これを応用した分析を「繋属述語の仮説」(Trans-Predicate Hypothesis)とした。

次に、受動の繋属述語 rar において語根に新しいカテゴリーである「空語根(√R^{o})」を想定した。この語根は素性的に空で、意味素性および音韻素性を持たないが、little v である a と併合することで言語計算に参加し、文の派生を可能にする。音素 r は日本語におけるデフォルトの子音(Lebrune 2014)として挿入される。

繋属述語を想定することにより、従来の取り組みでは説明できなかった使役と受動の意味解釈がどのようにして生まれるかを極めて構造的に明らかにすることができた。

使役は√s- ‘do’を語根に持つ他動詞構造を有するので、必然的に Agent と Theme 項を派生する。この二者は前者が後者に対して行為を行い状態変化を発生させるのが原義であり、それはすなわち使役の概念そのものである。

一方、受動の繋属述語は非対格構造を持つので、Theme（内項）を唯一の項として持ち、主語（外項）は現れない。繋属述語仮説では、rar がこのような非対格構造を持つと想定し、Theme が GetP の主語と指標的に関連することで状態変化の発生と結果状態の意味を表すと考える。この非対格的指標化が受動の意味の根源なのである。

以上のように、繋属述語仮説が正しいとすると、日本語では使役構文と受動構文は文法的に一般化された繋属述語を介して派生を行うという点で同様の形式を持つ。これは以下のように抽象化できると考えられる。

(6)　[Subject [(Agent) [Theme Event [√s/R^{o}-v]^{vP} s/r]$^{CausP/InchP}$ e]^{GetP}
Trans-Predicate

このような一般化された分析は繋属述語仮説により初めて可能となった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　9件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Hiroshi Aoyagi	４．巻 36
２．論文標題 On the peculiar nature of double complement unaccusatives in Japanese	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Journal of Japanese Linguistics	６．最初と最後の頁 1-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.1515/jjl-2019-2019	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Hiroshi Aoyagi	４．巻 TI18
２．論文標題 On the causative and passive morphology in Japanese and Korean	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Open Linguistics	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Hideya Takahashi	４．巻 TI18
２．論文標題 On the Acquisition of Potential Verbs and Conjugation Types of Verbs in Japanese	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Open Linguistics	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Takashi Nakajima	４．巻 TI18
２．論文標題 Heads and Layers in Agglutination: A Case in Deadjectival Psych Verbs with -garu in Japanese	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Open Linguistics	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Hiroshi Aoyagi	4．巻 XII
2．論文標題 On the Syntax of Causatives in Korean	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Universal Grammar and Its Cross-linguistic Instantiations: Proceedings of GLOW in Asia XII and the 21st Seoul International Conference on Generative Grammar	6．最初と最後の頁 21-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hideya Takahashi and Kensuke Emura	4．巻 90
2．論文標題 The Syntax of Potential Verbs in Japanese	5．発行年 2019年
3．雑誌名 MIT Working Papers in Linguistics	6．最初と最後の頁 317-328
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Takashi Nakajima	4．巻 12
2．論文標題 Weak Head and Its Morphosyntactic Consequences	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Proceedings of the 12th Workshop on Altaic Formal Linguistics	6．最初と最後の頁 207-218
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hiroshi Aoyagi	4．巻 19
2．論文標題 On the Source of Adversity and the Architecture of Verb Phrase in Japanese	5．発行年 2017年
3．雑誌名 The Syntax-Morphology Interface: Proceedings of the 19th Seoul International Conference on Generative Grammar	6．最初と最後の頁 53-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hiroshi Aoyagi	4．巻 24
2．論文標題 On Verb-stem Expansion in Japanese and Korean	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	6．最初と最後の頁 71-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高橋英也・江村健介	4．巻 12
2．論文標題 可能動詞の文法とその獲得に関する一考察：村杉説に対する批判的検討	5．発行年 2017年
3．雑誌名 岩手県立大学高等教育推進センター紀要 Liberal Arts	6．最初と最後の頁 15-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計18件（うち招待講演　2件／うち国際学会　13件）

1．発表者名 Hiroshi Aoyagi
2．発表標題 High Applicative in Japanese and Korean
3．学会等名 International Workshop on Morphosyntax and Language Universals（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 Takashi Nakajima
2．発表標題 Trans-Predicate Hypothesis for Causative and Passive: A General Theory of Secondary Predication (and more)
3．学会等名 International Workshop on Morphosyntax and Language Universals（国際学会）
4．発表年 2020年

１．発表者名 Hideya Takahashi
２．発表標題 Short Passives in Tohoku Dialects
３．学会等名 International Workshop on Morphosyntax and Language Universals（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Hiroshi Aoyagi
２．発表標題 On the Productivity of Multiple Verbal Suffixation in Japanese and Korean
３．学会等名 Linguistic Colloquium at Ritsumeikan University Osaka Campus（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hiroshi Aoyagi
２．発表標題 The syntax of causative meaning passive in Korean
３．学会等名 the International Circle of Korean Linguistics Conference 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hiroshi Aoyagi
２．発表標題 On the syntax of causative morphology in Korean
３．学会等名 GLOW in Asia XII and SICOGG27（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Takashi Nakajima
２．発表標題 Rare is not a morpheme and nothing moves in Japanese passive
３．学会等名 the 12th Workshop on Theoretical East Asian Linguistics（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 高橋英也・中嶌崇
２．発表標題 受け身「ラレ」の語彙分解と繋属述語仮説
３．学会等名 日本英語学会第37回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 高橋英也・江村健介
２．発表標題 V-e-te-i-ru形式のアスペクト解釈について
３．学会等名 日本言語学会第159回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 青柳宏
２．発表標題 階層的動詞句構造と外項の意味解釈について
３．学会等名 中京大学英米文学・文化学会秋季講演会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hideya Takahashi and Kensuke Emura
２．発表標題 The Syntax of Potential Constructions in Japanese
３．学会等名 the 14th Workshop on Altaic Formal Linguistics（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hiroshi Aoyagi
２．発表標題 On the Source of Adversity and the Architecture of Verb Phrase in Japanese
３．学会等名 the 19th Seoul International Conference on Generative Grammar（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Hiroshi Aoyagi
２．発表標題 An Introduction to the Workshop: Some Issues in Morpho-syntax in Japanese and Korean
３．学会等名 the Satellite Workshop on Morphosyntax in Japanese and Korean for JK25（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Hiroshi Aoyagi
２．発表標題 On Multiple Verbal Suffixation in Japanese and Korean
３．学会等名 the Satellite Workshop on Morphosyntax in Japanese and Korean for JK25（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Takashi Nakajima
２．発表標題 VC Mora in Predicate Formation
３．学会等名 the 19th Seoul International Conference on Generative Grammar（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Takashi Nakajima
２．発表標題 Heads and Layers in Agglutination: The LPD Approach
３．学会等名 the Satellite Workshop on Morphosyntax in Japanese and Korean for JK25（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Hideya Takahashi
２．発表標題 A Decompositional Approach to Potential (r)are in Japanese
３．学会等名 the Satellite Workshop on Morphosyntax in Japanese and Korean for JK25（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 江村健介・高橋英也
２．発表標題 可能動詞と自・他動詞の獲得過程から見る接辞eの役割について
３．学会等名 日本語文法学会第18回大会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

Hiroshi Aoyagi Academia.edu
https://nanzan-u.academia.edu/HiroshiAoyagi
Hiroshi Aoyagi ResearchGate
https://www.researchgate.net/profile/Hiroshi_Aoyagi
Hideya Takahashi ResearchGate
https://www.researchgate.net/scientific-contributions/14737092_Hideya_Takahashi
Takashi Nakajima ResearchGate
https://www.researchgate.net/profile/Takashi_Nakajima4
Academia.edu/HiroshiAoyagi
https://nanzan-u.academia.edu/HiroshiAoyagi
ResearchGate/Hiroshi_Aoyagi
https://www.researchgate.net/profile/Hiroshi_Aoyagi
ResearchGate/Takashi_Nakajima
https://www.researchgate.net/profile/Takashi_Nakajima4
ResearchGate/Hideya_Takahashi
https://www.researchgate.net/profile/Hideya_Takahashi2
JK25 Satellite Workshop on Morphosyntax
https://jk25-satellite-morpho-syntax.jimdo.com/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中嶌　崇 (Nakajima Takashi) (80288456)	富山県立大学・工学部・准教授 (23201)	
研究分担者	高橋　英也 (Takahashi Hideya) (90312636)	岩手県立大学・公私立大学の部局等・准教授 (21201)	